

現代スポーツの問題点

——その大衆化と高度化を中心として——

瀬戸口 照夫

I. はじめに

スポーツを論じる場合、若干の整理をしておかねばならないことがある。それは「体育」という言葉と「スポーツ」という言葉の使用の混同である。これは、それらの言葉が同じような状況の中で使用されていたことを意味する。

体育とスポーツの区分の困難さはどこに起因するかといえば、それらの基本的成立要素が「身体運動」であることによるようである。身体運動は、人間の日常的活動の中にみることができるけれども、日常活動イコール体育・スポーツとはいえないのである。したがって、身体活動に一定の意味付けをした場合、それは日常活動以上の意味を持つことができる。

「体育」という言葉は、字義通りにみれば「身体教育」(physical education)である。この場合、身体教育か、身体運動の教育かの問題が生じるが、「身体」その物だけを対象とした、即ち「肉体」として考えるところの教育と、「身体」を人間の内・外的要因によって活動させることによる教育とを完全に区分することは、体育を考えるうえにできない。何故なら、われわれの身体運動は、純粹に生物学的生理学的裏付けなしでは成立し得ないものである。したがって、身体運動は、人間の心理的社会的要因と生物的生理的要因等の相互作用によって成立するものであるという認識が必要となる。そして、このような要因の集合した型の身体運動を通して、意図的にある方向へ、あるいはある効果を期待されて実践されるのが体育なのである。「教育」は人為的、意図的に、一定の効果を期待し、目標を設定しそれを成就すべきすぐれて人間的営みであることからして、体育も決って例外ではない。このように、身体運動に人為的、意図的な方向性を課し実践した場合、それは日常活動以上の意味をもつのである。

わが国における「体育」の実際的内容は、主としてスポーツをその教材としているのである。もちろん、格技やダンス、体操等も含まれているが、大半はスポーツ種目である。このことから、スポーツは体育の下位概念として考えられがちである。教育的意図に基づいた「身体運動」は体育として理解して何んら差しつかえないが、体育の構成内容であるスポーツ種目それ自体を体育と理解することは妥当でないと思われる。身体運動を教育的意味以上に拡大し、歴史的・社会的・文化的な活動であると認識するときはじめてスポーツはその性格を特徴付けられるし、妥当な理解が得られるであろう。

歴史的・社会的・文化的産物であるスポーツの現代的意義を論じる場合、スポーツの大

衆化と高度化を切り離して考えることはできない。そして、スポーツを取り巻く色々な問題は、歴史・社会・文化の問題と密接に関連しているという視点が要求されるのである。

Ⅱ．本論の展開

1) スポーツの概念と問題

わが国において、スポーツという言葉が一般化したのは、昭和に入ってからだといわれている。それ以前は「遊戯」とか「競技運動」と呼ばれていた。¹⁾

ところで、「スポーツ」の語源は、中世ロマンス語に由来していると言われている。運ぶ、持ち去るを意味するラテン語の *desportare* に由来し、それが気分転換する、気をはらす意味の動詞 *desporter* や *deporter* へと推移し、それから *desport* という男性名詞がつくられた。11世紀ごろにこの *desport* がイギリスにとり入れられて *disport* に変形し、その頭母音が脱落して *sporte* になり、16世紀ごろに現代の *sport* という英語が使用されるようになった。そして、その *sport* はイギリスからフランスへ逆輸入され、[spɔ:r]と発音され、またドイツ語使用圏においても [ʃport] と発音され使用されている。²⁾

英語の *sport* は、O・E・Dによれば、慰み、楽しみ、気晴し、気分転換、好色のあそび、愛の交際等の意味がある。³⁾ このように色々な意味に使用された *sport* は、今日、「運動競技」と同義語的に使用されている。そしてまた、それは語源からみても、語義から広く解釈すれば「遊戯」のカテゴリーに包含される。

ジレは「スポーツ史」(*Histoire du sport*)の中で、スポーツの成立要素として、遊戯、闘争、および激しい身体活動を挙げている。そして、彼はこのような三つの要素をかねそなえた運動にスポーツという言葉制限するなら、同時に高尚な観念を得るというのである。即ち、「スポーツマンは、人間生活の本当の品位、本当の意味を形造るところのものは実利的でない或るもの、誰にでも出来るというのでない或るもの、そしていかなる職業教育も与え得ない或るものであることを自然とさとするであろう。それはあらゆる形式下における物質的利益の蔑視と、理想を愛する心（他の人々に言わせれば、無用のものを愛する心）である。」と書いたアンドレ・ラランドの言葉を引用しているのである。⁴⁾ これは、非実利的、非日常的な世界において人間生活の意味を形成する一つの活動がスポーツであることを意味しているのである。そしてまた、スポーツの精神主義的側面をも強調しているのである。

ジレの挙げた三要素の中で、遊戯に関してはホイジンガやカイヨワがそれを分析している。彼等は一致してプレイの自律性と自由性を主張しているといえよう。⁵⁾ 即ち、プレイはプレイ自体のために遊ばれるといった「自己目的性」が基本的な性格なのである。そしてまた、それは誰の為にでもなく自分自身の為であり、自らの要求に応じて実践されるものである。したがって、プレイのもつ自律性と自由性は、スポーツの基本的な性格を特徴付けるのである。スポーツは自己目的的な活動であり、自由な活動である。ところが、この

ような意味で実践される場合は少ないように思える。それは、スポーツが歴史的、社会的、文化的に影響を受け、それらの変動と同じように変化することを意味するのである。

競技としてのスポーツは、単なる遊びとは異なり、競争的性格を有している。競争は、自分自身に与えられた、あるいは自身で獲得した資質の優劣を示めそうとするものである。その意味で「まじめさ」をもって、自己の資質の向上を願う。したがって、自己の能力の向上のために、スポーツそれ自体は手段化されていくことになる。しかしながらこの手段化は、少なくとも自己の目的を成就するプロセスでの手段化であって、戦争や軍事的体力増強を目的とした手段化とは切り離して考えるべきである。とは言っても、スポーツが政治的原理で、戦いや争いのために手段化された歴史的事実を考えると、スポーツのもつ性格のうち、どの性格がそのような目的のために手段化され得たのかを思慮しなければならない。

スポーツの手段化を考えると、ジレが指摘したスポーツの基本的要素の中の闘争性は、スポーツが戦いや争いのための手段となり得ることを暗に意味しているように思える。「闘争」は何ものかのための闘争であり、何ものかをめぐって相手を打倒し、勝利を得ることをめざすものである。⁶⁾したがって、闘争は何ものかの目的を達成するための手段となり得る。この闘争性が、「競技」における競争性と重なり合ったとき、スポーツはスポーツそのものを目的としないで、他の目的のために手段化され得るのである。

「競技」(agôn)という言葉は、ἀγών(アゴーン)がその基礎語であると Jüthner, J. はいう。彼によれば、このアゴーンは、ἀελλος(アゼロース)と共に現われた「競技」(Wettkampf)に対する第二番目の名称であり、もともとアゼロースが「競技」に対する一番目の名称であった。その時点において、アゴーンは「集会」や「集会所」を意味していたが、集会や君主の葬式や国民祭、あるいは神祭においてダンスや競技が実施されていたので、次第にダンスや競技の意味に移り、一番目の名称であるアゼロースはほとんど使用されなくなったという。⁷⁾一方、Athletik も「競技」と訳すが、この Athletik は、身体を使用してあることを成就するために賭物をめぐって行なわれ、娯楽に役立っていたので特別に賭物の獲得において力を成就する意味をもつ ἀελλος(アエゼロース)がその基礎語であるという。⁸⁾

このように、スポーツと連関した概念である「競技」は、その語源的意味からして、スポーツの手段化の可能性を十分に明示しているのである。

ところでスポーツのもつ基本的要素である「競争」性と、社会経済的意味におけるところの競争性とは、質を異にすることはいうまでもないが、スポーツの歴史的発展過程を概観したとき、今日のスポーツの競争性の高まりは、かならずしもスポーツそのもののもつ競争性のスポーツ自体の中からの高まりであるとは断言できない。スポーツにおける競争性の高まりは、その置かれている歴史的・社会的・文化的状況の在り方によって変化してきたと考えられる。例えば、産業革命以後の工業化社会、機械化の出現は、労働力としての身体に注目し、また、近代資本主義社会の発展は「競争」性の強調によって裏付けら

れているように思える。したがって、スポーツが政治的手段、経済的發展のための手段になり得る要因も近代社会には多分に存在するのである。

オリンピックというスポーツの場における政治的影響も、少なくとも社会的状況を反映したものといえるが、スポーツのもつ自由性は、逆説的には手段化し得る「自由性」を内包しているのである。しかしながら、スポーツの本質論からいえば、スポーツの場に対して政治を介入させたまさに社会的人間の問題として捉えていかねばならない。

さらに、スポーツのもつ「競争」性は、一般的にいて、それが自己目的化することによって、人間文化の創造的契機にもなるし、破壊的契機にもなり得ることに留意しなければならない。⁹⁾

2) 概念規定の諸説と問題

上述のように、スポーツの語源や語義、さらに基本的要素を概観してきた。ここでスポーツに対する概念規定の二・三の諸説を検討してみたい。

イギリスの McIntosh は、『sport in society』の中で、スポーツの概念規定の困難さを次のように述べている。

「スポーツは、多くの点で人間の生活と関係があるので、スポーツ活動を限定したり、その概念を規定することは困難である。スウェーデンの Idrott, ドイツの Spiel, アメリカの Athletics には、はっきりとした定義が認められるが、スポーツはそれ等よりもはるかに適用範囲が広い。フランス語の起源では、それは生活のいたましい、あるいは真面目なもののからの気晴らしに名づけられていた。そして、それは山登りから恋をすること又、自転車レースから悪ふざけまでの広範囲な活動に適用されている。また、それは一つの名詞として男・女・ゲーム・娯楽・狩猟・戦い・冗談・植物の突然変異にまで言及する。」¹⁰⁾

このように適用範囲が広く、一線画することはかなりむずかしいけれども、今日、身体運動に重点を置いて使用されているのである。

スポーツの歴史は人類の歴史と共に古い。したがって、現代のスポーツを考える場合においても、当然、前近代のスポーツを考慮する必要があるが、この小稿では論じきれないので別稿で論じたいと思う。

現代のスポーツと限定したかぎりにおいては、その伝統の起源を近代ヨーロッパに求めざるを得ない。即ち、産業革命以後にスポーツの具体的發展の事例が認められるからである。「組織化」や「規範化」といった言わば制度の確立は、19世紀の英国の中産階級の働きである。このような制度化が、現代スポーツの伝統の起源を近代ヨーロッパに求めることを正当化するのである。近代初期の伝統的スポーツの概念は次のような性格を有しているといわれている。¹¹⁾

- ① 自己目的的活動として非実利的なものである。
- ② 人生にとって第二義的なもので、本務を妨げてはならない。

③ 個人的な事柄である。

④ フェア・プレー、スポーツマン・シップ等のスポーツ規範の強調。

このような性格を有していた19世紀の英国のスポーツは、中産階級や産業革命以後の資本主義の発展にともなうさまざまな社会変化との関連をぬきにして考えることはできない。この時期のスポーツは、貴族から新しい支配階級としてのブルジョアジーにその担い手が移った時期でもあった。したがって、支配階級の論理の一面が、スポーツに対して積極的な意味付けをしたと考えられる。即ち、非実利的見解やスポーツの規範化は、スポーツのもつ競争性に対する態度形成のための、教育的倫理的価値の付与であるといえよう。

1964年10月、東京で、International Council of Sport and Physical Education の総会が開催され、「スポーツ宣言」がなされた。そこでは次のようなスポーツの定義が示された。

① 遊戯の性格をもち、自己とのたたかひの形式をとるか、他人との競争を含む活動は、すべてスポーツである。

② この活動が競争的に行なわれるときには、常にスポーツマン・シップの精神をもって行なわれるべきであって、フェア・プレイのないところに真のスポーツはあり得ない。¹²⁾

この定義は、遊戯性と競争性の結合を強調し、そして、その結合から必然的に結果し得る問題に対する精神性を重要視している。これは先の伝統的スポーツの考え方では捉えることのできなかった現代のスポーツの変化を考慮したものといえよう。

現代スポーツの変質や多様化の実体は、その概念上からの多義性を考えれば当然のことといえよう。プロ・スポーツは言うまでもなく、商品宣伝のためのスポーツ等、営利を目的としたスポーツは、まさに変質化された最たるものである。現代スポーツの特色としての変質は、スポーツの自己目的性という本質論に反して、手段化への変質である。手段化されることのマイナス面だけを強調することはさけねばならないが、手段化にはスポーツマンの自由と人間性の尊重を強調してしすぎることはない。体力増強のためのスポーツも、それが手段化されたものである。確かにスポーツを行うことによって、心身共に何んらかの好影響を得る可能性はあるが、体力に配慮しなければならない社会的、歴史的要因を見過してはならない。

3) スポーツの大衆化

1960年代にわが国の経済は著しい発展を遂げたことは周知のところである。1957年の新長期経済計画の発表は、多くの労働者を必要とし、その生産力に注目し、生産活動に耐え得る能力・体力に焦点が集中したことは考えられるところである。この高度経済成長期に符合するかのように「スポーツ人口」にも著しい変化が表われたことが指摘されている。¹³⁾即ち、1957年から1972年の間に4倍ものスポーツ人口が増加したのである。これは、高度経済成長と無縁ではなさそうである。生産力としての人々の体力の増強は、生産性を高めるうえで必要不可欠なことであり、他方では労働者不足も符合していたとはいえ、明らかに

経済成長を一義的に考える価値観に支えられ台頭してきたとみることができる。一方、都市生活における運動不足・ストレス、それと相俟って余暇時間の増加等の符合によって、人々の運動欲求が高まってきたことも指摘できる。

しかしながら、これらのスポーツ人口の増加、スポーツ実践への欲求は単純に評価できるものではない。即ち、スポーツの大衆化は、高度に発達した科学技術＝機械文明によってもたらされた諸々の問題とのかかわりの中で発生してきたものである。したがって、このような状態を無視し、短絡的によりよいスポーツへの参加の方法を論議することは、「資本主義体制のなかで醸成される人間疎外の現実を肯定し、そこからもたらされる人間性否定の本質を追求することなしに、スポーツをして単純に『人間性回復』、あるいは『労働力の育成＝生産性向上』のための重要な手段として位置づける」¹⁴⁾ことになる。

元来、人間は身体運動を通じて、人間のもつ身体的能力を充分に発揮でき、またそれを創造的に表現できるものである。したがって、スポーツは現実社会における諸矛盾からくる身体的精神的不健康な状態から人々を健全な方向へ引き戻す機能を有することも指摘できる。だけれどもわれわれは、このような機能を有するからといって、簡単に肯定的に評価するわけにはいかない。確かに、スポーツ活動のもつ「身体運動」の要素は、人間の本来の諸能力のひとつであり、その能力開発や向上のための努力を否定することはできない。しかしながら、「現状におけるスポーツの活動の実践が人間の身体的能力を高め、他面、精神的緊張の緩和に効果的に役立ち生産を高めれば高めるほど、それはスポーツ実践の主体者を搾取し彼らに対する支配を強化するものとして作用する側面をもっている。そしてスポーツ実践者の真の人間の解放や人間的発展には機能しえないばかりか、それを阻害する側面をもっている」¹⁵⁾。この論述は、資本主義社会における生産性向上を第一義的に考える発想、さらにその生産性向上のための労働における人間疎外の問題に対する批判であり、そのような状況下でのスポーツ活動の必要性を強調することへの疑問でもある。またこのことは、大衆をスポーツ活動を通してある一定の方向へ操作しようとする意図を読み取らねばならぬことをわれわれに示唆している。

大衆スポーツはあたかも大衆のものであるかのように思われるが、それ自体商業主義的スポーツ、営利を目的としたスポーツが主であって、その意味においては資本蓄積の手段となる可能性があり、大衆の手の内にあるとは思えないのである。資本主義社会におけるこのようなスポーツは、労働からの解放、一時的な楽しみ事として、本質的な人間の向上への媒体としては疎遠なものになる。「資本の支配のもと、またそれに従属する形でのスポーツの大衆化はまったく幻想にすぎないものであり、このような状況でのスポーツ活動は勤労者を真に豊かに発展させるものではない。それはスポーツが労働と無縁なものとして存在し、労働を支配する者たちによって勤労者の操作の手段、また資本蓄積の手段として位置づけられ、反人間的・反国民的内容をもつものとなっているからである。」¹⁶⁾

しかしながら、このようなスポーツの大衆化の把握の根底には、国民がスポーツ活動を

望み実践しているという客観的条件があり、それと資本主義社会を特徴付ける商業主義スポーツ、営利主義スポーツが輻輳したという考えに基づいているといえる。元来、スポーツ活動は、労働と分離したときにその特徴が著しくなるのであって、したがってそれが不分離な状態の時とは質的に差異があるのはしごく当然なことである。問題は、スポーツを資本蓄積の手段とすることにあるのであって、資本主義社会におけるスポーツ活動が全て反人間的、反国民的活動であるとは考えられない。また、スポーツは、非日常的世界での常みであり、そこに展開されるドラマは現実社会と切り離して理解可能である。とはいえ、スポーツを実践する人々は、現実社会で労働する人々である。彼等は資本主義社会機構の諸矛盾の中で労働していることも事実であることからして、非日常的世界内での存在の仕方はある意味では決定されているのかもしれない。体力増強・人間性回復・レクリエーション等をその論拠とした「大衆スポーツ」論は、その目的をもって活動しなければならない基本的問題の解決策までは提示できないであろう。即ち、そのような目的があって初めて大衆化し得るという発想にその論拠を置いているからである。そのもうな目的は現代社会の抱えている重要な問題であり、いうまでもなく個々人にとっても大きな関心事である。体力不足、人間性否定の労働は決して個々人のレベルの問題ではなく、すぐれて現代社会の問題であることを指摘し得る。

体力の問題とスポーツの大衆化とのかかわりを、われわれは単なる生物学的意味だけで理解しては事の真相本質を見誤ることになる。機械技術の発達、人間の基本的運動を減少させ、その結果運動不足からくる体力減少の状況を作り出し、個々人に運動の必要性を痛感させるようになった。したがって、個々人の生物学的欲求からだけでスポーツの大衆化が展開されたと考えることは決して妥当な理解の仕方ではない。

個人的・社会的に輻輳し展開してきている大衆スポーツは、1961年の「スポーツ振興法」によって法的に裏付けされることになった。この法律によれば、スポーツは「運動競技及び身体運動（キャンプ活動その他の野外活動を含む）であって、心身の健全な発達」を目的として実践されるものをいうのである。この法律は、スポーツを手段として国民の「心身の健全な発達」をその役割としているのである。これは「スポーツの振興に関する施策の基本を明らかにし、もって国民の心身の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与することを目的」としたこの法律の主旨によるものである。このようなスポーツの役割の考え方は、わが国の伝統的な考え方であり、「運動としてのスポーツの楽しさ、その自己目的的な役割を認めることにはためらいがあり、そして手段的役割が強調されていた」¹⁷⁾のである。

このスポーツ振興法が出された3年後には、東京オリンピック大会が開催された。この大会はわが国のスポーツの転機であったといわれている。そして、スポーツに対する人々の関心が増し、「大衆スポーツ」論の幕あけの大会でもあった。さらに、外国選手との体格差、体力差をまざまざと見せつけられた為に、大会前は「スポーツのための体力」が強調

されていたのに対し、大会後は「体力のためのスポーツ」が強調され出したことが指摘されている。¹⁸⁾そしてまたこの考え方は、1968年の学習指導要領の改訂に反映し、「戦後の体育の考え方が『からだの教育』から『運動を通しての教育』へと変わり、それが漸く定着した時期であっただけに、再びからだの教育にかえったのではないかというようなとまどいも感じさせることになった。」¹⁹⁾

このように、体力に対する関心の高揚に乗じて、「大衆スポーツ」を営利目的とする企業が急成長したことはボーリングブームを例に引けば明白である。しかしながら、表面的な高揚であったために、即ち、質的な高まりではなかったが故に、火の消えるがごとくブームが去って行ったことは記憶に新しい。けれどもスポーツの大衆化が終りを告げたわけではなく、人々は新しいスポーツを求めたのである。

4) スポーツの高度化

次にわれわれはスポーツの大衆化と切り離すことのできない「高度化」の問題を取り上げねばならない。スポーツの高度化といった場合の意味するものは何か。一般的には技術水準の高度化を意味し、それにくらべスポーツに対する本質的認識の高揚を意味する場合は少ないように思える。

われわれはスポーツを実践する場合、楽しみながら実施すると同時に、よりうまくなろう、相手を陵駕しようと思いながら実践する場合が多い。技術的高度化の原点はこのような自然な欲求にその源泉をみい出すことができる。だが、今日一般的に論じられる「スポーツの高度化」とは、スポーツの大衆化と対置される意味で使用される場合が多く、いわゆる一部の「エリートスポーツ」におけるスポーツ「技術」の複雑かつ多彩な「巧みさ」を意味するものである。スポーツの大衆化は、量の拡大の問題であり、高度化は技術の困難さ、多様さを意味して論じられる場合が多い。

このようなスポーツの高度化は、その土台に「勝利至上主義」の発想がみられるのである。勝利を得るためには、より以上の高度な技術が要求されるわけである。勝利を得ることだけに関していえば、精神的な要素も加味されねばならないが、上述した通り高度化は、スポーツ技術を主として論じられるのである。「勝利至上主義は、つねに国威発揚、国力の誇示という態度と一体のものとなる。」²⁰⁾と論じられるように、大きな規模の国際大会ともなるとなおさらのことである。そして、このような大会で優秀な成績を修める選手を育成するためには、多大な経済的国家的援助の必要が生じるのである。このことは、国家的管理体制を整えることによって、スポーツの優秀な選手だけを育成していこうという路線と一体化し得るのである。その良い例をここに引用する。

女子体操界でルーマニアのコマネチといえば世界的に有名な選手で、彼女は「第七体育学校」の生徒であった。「コマネチがその生徒であったこの学校は、ルーマニア西部のデバ市にある。それは六歳から十八歳までの女子を入学させている。この学校への入

学生は、教員やコーチが全国からスカウトしてきた子どもたちである。もうひとつ公募もある。公募の方は一万二千人が応募し、パスしたもの五十人というから、たいへんな競争率である。入学がきまると全員が寮にはいり、はげしい体操教育がはじまる。一中略—もちろんこの学校では、体育学、医学、生理学、栄養学、教育学などの有能な頭脳が動員されているだろう。そして最高度の科学的管理が実行されているにちがいない。一中略—「ここではオリンピック、世界選手権に勝つ、という目標にいっさいの努力が傾けられている。だからここは管理体操教育を徹底させた“選手養成工場”にすぎない」。一中略—しかし曲芸化しつつあるといわれる体操競技で勝つための方法は、この『第七体育学校』方式以外にあるまい。一中略—その訓練はけっして『拷問』的管理ではない。ある意味では『教育』的管理とさえ言えよう。ひょっとすれば『人間』的管理でさえあるであろう。多分彼女たちには、精神の緊張を解放させる遊び、日々の生活の単調さをやぶる余暇、などが周到に提供されているだろう。一中略—ただ、それがほんとうに彼女たちの人間的成長のために用意されているのか、体操選手の養成にとって不可欠の要素としてあたえられているのか、そこが問題である。²¹⁾

これは、現代の管理体制を象徴するもので、一見当然のようであり、また非常な危険性を孕んでいるのである。このような国家的管理体制は、勝利を得るために最も適切な方法であるという発想からすれば首肯し得るだろうが、何かやりきれなさを禁じえない。

また、「五名の優秀な選手を生み出すためには幅広い層のスポーツ愛好者、すなわち 100 名の底辺部分をもつ」²²⁾ことも必要条件であるという。これは、スポーツの大衆化が優秀な選手を生み出すための手段となったことを意味するものであり、東京オリンピック以前の「大衆化」路線もまさにこのような発想によるものであったと思われる。

Ⅲ. おわりに

スポーツの高度化の論理には、大衆化を手段化することによってその成就をみることが出来るという発想があったのである。このようにみえてくると、スポーツの大衆化は本当に大衆のためのものではなく、ある一部のスポーツマンのためのものであり、「スポーツ文化」の意義や意味を問題にしたものではなかったのである。本来、スポーツ文化は、人間の運動諸能力の可能性を引き出すために、あらゆる人間の努力を必要とする文化である。言語と運動が人間の相互交流や自然との関わりを可能にしたように、スポーツ文化もそのような意味を持ち得ることはいうまでもない。このような利点をわれわれは手段化の型ではなく、自己目的論的な考え方で捉えていかねばならない。

現代のスポーツは、大衆化と高度化を区別して考えるのではなく、それらを一義的に捉えていかねばならない。そうすることによって、いつでも、どこでも、誰にでも実践できるという理論的枠組が明確になるとと思われる。また、「勝利至上主義」や「選手中心主義」的な考え方によって阻害された「大衆スポーツ」をまさに大衆のものとして考える論理的

基盤となることをも意味する。「国民スポーツスポーツの大衆化を前提としたもの一は、いつでも、どこでも、気軽にスポーツ要求を満たし、そのことによって文化的水準を高めかつ身体的能力の充実をはかり、いっそう拡大していくことができ、同時にそれは高度な技術を獲得し発展させていけるものでなければならない。²³⁾」この主張の実現こそ、真の意味での「スポーツの大衆化」であると考えている。

〔引用・参考文献〕

- 1) 木下秀明 『スポーツの近代日本史』, 杏林書院, 昭和45年, P.260
- 2) 岸野雄三 『スポーツの技術史』, 大修館書店, 昭和47年, pp. 2 ~ 3
- 3) Oxford English Dictionary.
- 4) ベルナル・ジレ, 近藤等訳 『スポーツの歴史』, 白水社, 昭和47年, p.17
- 5) ヨハン・ホイジンガ, 高橋英夫訳 『ホモ・ルーデンス』, 中央公論社, 昭和45年
カイヨワ, 清水幾太郎・霧生和夫訳 『遊びと人間』, 岩波書店, 昭和45年
- 6) 菅原 礼 『序説運動学』, 大修館書店, 昭和43年, pp.216~217
- 7) Jüthner, J. 『Leibesübungen』 Teil.1, Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1965年 ss.
13~14.
- 8) Jüthner, J. ibid, ss.11~13
- 9) 2) の p. 6
- 10) P. C. McIntosh 『Sport in Society』, C. A. Watts & CO. LTD, 1963年, p.11
- 11) 竹之下休蔵・磯村英一 『スポーツの社会学』, 大修館書店, 昭和45年, pp.13~14
佐伯聡夫 「スポーツとスポーツ社会学開題」高知大学学術研究報告第18巻, 社会科学第4号, 昭和44年, pp.36~37
- 12) International Council of Sport and Physical Education 「Declaration on Sport」, 1964年
- 13) 江刺正吾 「スポーツの大衆化」, 『国民スポーツ文化』, 大修館書店, 昭和52年, p.359
- 14) 川口智久 「現代スポーツの基本問題」, 『現代スポーツ論序説』, 大修館書店, 昭和52年, p.169
- 15) 同 上, p.169
- 16) 同 上, p.174
- 17) 竹之下休蔵 「80年代の社会と体育・スポーツの役割」, 体育科教育, 大修館書店, 昭和55年1月号
p. 3
- 18) 同 上, p. 4
- 19) 同 上, p. 4
- 20) 14) の p.190
- 21) 日高六郎 『戦後思想を考える』, 岩波新書, 昭和56年, pp.97~99
- 22) 14) の p.190
- 23) 14) の p.193

(本稿は鹿児島県立短期大学地域研究所発行の「くろしお」vol.2, No.2の「スポーツ」考を改訂, 加筆したものである。)